

支那米の袋

夢野久作

青空文庫

ああ……すっかり酔っちゃったわ。……でも、もう一杯カニヤックを飲ましてちようだいね……。

あんたもお飲みなさいよ。今夜は特別だからサア……ええ。妾^{わたし}の気持ち^{わかし}が特別なのよ。今夜は……。

……そのわけは今話すわよ。話すから一杯お飲みなさいったら……それあトテモ恐ろしい話なのよ。……ダメダメ。いくらあんたが日本の軍人だつて、妾の話をおしまいまで聞いたら屹^{きつと}度ビックリして逃げ出すにきまつているわよ。

……ああ美味^{おい}しい。妾もう一杯飲むわ。へべれけになるわよ今夜は……ニチエウオ！……レストラン・オブラーコのワーニヤさんを知らないか……つてね。管^{くだ}を巻くわよ今夜は……オホホホホホ。……でも、あんたはその話を聞く前に、妾にいくらでもお酒を飲ましていい理由^{わけ}があるのよ。何故つて妾はこの間から何度も何度もあんたを殺したくなつた事があるんですもの……マア。あんな顔をして……ホホホホホ。まあそんなに怖い顔をしなくてもいいから一杯お飲みなさいったら、シャンパンを抜いたからサ……。

……アラ……何故いけないの。おかしな人ねあんたは……まあ憎らしい。妾、そんな薄

情物じゃないわよ。あんたを殺してお金を奪^とったって、いくらも持ってやしないじゃないの。亜^ア米^メ利^リ加^カの水兵の十分の一も持っていないこと妾チャンと知っているわよ。ホラ御覽なさい。ホホホホホ。だからそんな余計な心配をしないで一パイお飲みなさいったら……飲まなけああんたを殺したいわけを話さないからいい……寝てる間^まに黙^もって殺しちゃうから……さあ……グツと……そうよ。サアも一つ……これは妾を侮辱した罰よ。ホホホホホホ。

今夜もそうなのよ。チョット電燈^{でんき}を消すから、その窓から向^む家^{こう}の屋根を覗^{のぞ}いて御覽なさい……ホラ、あんなに雪が斑^{まだら}になつて凍り付いているでしょ。妾はあの屋根の雪の斑を見るたんびにあんたを殺したくてたまらなくなるのよ。……だからそのたんびにお酒を飲むの。ウオツカでも、ウイノーでも、ピーヴオでも何でもいいの。そうすると忘れちやつてね。あんたを殺すのを忘れちやつて寝てしまうから……ああ美味^{おい}しい。妾もう一杯飲むわ。……イイエ真剣なの。ホントウに真剣なのよ。そうして今夜こそイヨイヨ本気になってあんたを殺そうと思^{おも}っているのよ。だから今夜は特別なのよ……だってあんたはちようどこんな晩に、妾^{わたし}を生命^{いのち}がけの旅行に連れ出して行^いった男にソックリなんですもの……背^せの高さと色が違うだけで、真正面^{まとも}から見ているとホントに兄弟かと思う位よ。だからコンナ

に惚れちゃったのよ。……イイエ……ちつともトンチンカンな話じやないの。妾、そんなに酔ってやしないわよ。カニヤツクなんかイクラ飲んだって管なんか巻きやしないから……その訳はこうなのよ。まあお聞きなさいったら……トンチンカンでもいいからサア……。あんたはツイこの頃来たんだから知らないでしょうけども、この間、此浦塩ここのを引き上げて行つた亜米利加アメリカの軍艦ね。あの軍艦ふねの司令官の息子でヤングっていうのが、その男なのよ。……ええ……司令官と同じにヤングっていつてね。名前だか苗字だかわからないけど、只そういつていたの……そうネエ。年は三十だつて云つていたけど、あんたと同じ位に若く見えたわ。六尺位の背丈けの巨男おおおとこでね。まじめな、澄まアした顔をしていたわ。あの軍艦ふねの中でも一等のお金持ちで、一番の学者だつて、取り巻きの士官や水兵さん達がそう云つていたから本当でしょうよ。もっとも学者だつていうけど、あんたと違って歌も知つてゐるし、音楽も出来るし、お酒はいくら飲んでも平氣だし、ダンスでも賭博ばくちでも、あんたよりズツト巧かつたわ……それからもう一つ……お話がトテモ上手だったの。イイエ。そんな六箇敷むずかしい話じやないの。それあステキに面白い……トテモ恐ろしい恋愛の話よ。ヤングはその方の学者だつて、自分でそう云つていた位だわ。

……ええ……そのヤングは軍艦が浦塩うらじおに着くと間もなく、このオブラーコの舞踏場へ

遣^やつて来て、一番最初に妾を捉^{つか}まえて踊り出したの。そうしたら妾の身体^{からだ}が、ヤングの半分位しかなかったもんだから、一緒に来た士官や水兵さん達が、みんなでワイワイ冷やかして、ピューピュー口笛を吹いたりしたの。……そうしたらヤングも一緒になって笑いながら、妾をお人形さんのように抱き上げて、この室^{へや}へ逃げ込んだと思うと、妾の内ポケットから鍵を取り上げて扉^{ドア}をピツタリと掛けてしまったの。……その素早かった事……でもその時は、妾が店に突き出されてから、まだやっと二日目位だったし、男ってどんなものか知らない位だったもんだから、ホントウにビックリしてしまって、一生懸命ヤングの軍服の胸に獅^し噛^がみ付いていたわ。だけどヤングは、この室^{へや}で二人切りになると、トテモ親切に妾を慰めてくれたのよ。落魄^{おちぶれ}男爵の娘から、こんなレストランの踊り子にかわった妾の身の上話を、シンカラ同情して聞いてくれたり、お料理やお菓子を色々取ったり、お酒をいくらでも飲んでくれたり、お金を持っているだけ、みんな置いて行ってくれたりしたので、妾ホントウに嬉しかったわ。それはみんな亜米利加^{アメリカ}の貨幣^{おかね}だったけど、主人は大ニコニコで私の頭を撫で、

「大手柄大手柄……あのお客人を一生懸命で大切^{だいじ}にしろ……」
って云ってくれたわ。

それからヤングは毎晩のように妾の処へ遣つて来たの。そうして妾とだんだん仲よしになつて来ると、いろんな事を妾に教え初めたの。亜米利加の言葉だの、ABCの読み方だの、キッスの送り方だの……誕生石の話だの……花言葉だの……だけど、その中でも一等面白くて怖かつたのは、やつぱり、そのステキな恋愛のお話だったわ。妾ホントに感心しちゃつたのよ。ヤングが何でもよく知っているのに……。

それは亜米利加のお金持ち仲間で流行る男と女の遊び方で、お金持ちになればなる程、そんな遊びの方法が乱暴なんですつてさあ。……ええ……それはトテモ贅沢な室の仕掛けや、高価いお薬や、お金のかかる器械や、お化粧の道具なぞが、いくらでも要るので、貧乏人にはトテモ出来ない遊びなんですつてさあ。そうして亜米利加の若い男や女は、そんな遊びがしたいばかりに、一生懸命になつて働らいて、お金を貯めているんですつてさあ。

その遊び方法つていつたら、それあ沢山あるわよ。みんなお話しするのは大変だけど、一寸云つて見ればね……紅で作つたチューインガムや薬みたようなものを使つて、相手を血まみれの姿にし合いながらダンスをしたり……天井も、床も、壁も、窓掛けも、何もかも緋色づくめにした部屋の中に大きな蠟燭をたつた一本灯して、そのまわりを、身体

中にお化粧して、その上からにおいあぶら香油をベトベトに塗った素す裸ばだか体の男と女とが、髪かみ毛のけを振り乱したまま踊りめぐつたりするんですとさあ。そうするとその蠟燭の光りの赤い色が、壁や、天井の色に吸い取られて、まるでおにび燐火のように生白く見えて来るにつれて、踊っている人達の身体の色がちようど、地獄に堕ちた亡もうじや者を見るように、赤や、緑色や、紫色に光って見えて来るんですって。それと一緒に身体じゅうの皮膚がポツポと火熱ほてり出して、燃え上るような気持ちになって来るもんだから、その苦し紛れに相手をシツカリと掴まえようとすると……ホラ、油でヌラヌラしていてチツトモ力はいが這入らないでしょう。そのうちに、死ぬ程苦しくなつて、ヘトヘトに疲れて倒れてしまふんですってさあ……ねえ。ずいぶんステキじゃないの。……けどまだ恐ろしい話があるのよ。

……エ……もう解つたつていうの……。嘘うそばかり……。わかるもんですか。ズツとおしまいまで聞いてしまわなくちや、解りやしないわよ。妾めかけがあんたを殺したがっている訳は……まあ黙つて聞いてらっしゃいしたら……上等の葉巻を一本上げるから……。

そうしてね……そんな恐ろしい楽しみを続けて行くとそのうちには、とうとう、どんなに滅茶苦茶な遊びをしても直じきに飽きるようになってしまふんですって。そうして最後おしまいには自分が可愛いと思つている相手を、自分の手にかけてなぶ捌り殺しか何かにして終しまわなく

ちや、気が済まないようになるんですってさあ。……つまり自分の相手をまだ可愛がり飽きないうちに殺しては又、新しい相手を探し探して行くのが、亜米利加で流行る一番贅沢な遊びなんですってさあ……ホホホホホ。ビックリしたでしょう。ねえあんた。誰だつてそんな話ホントにしないわねえ。妾もそんな時には嘘だつて笑い出した位よ。だつてそれあ男だつたらそんな事が出来るかも知れないけど、女がそんな乱暴な遊びをしようなんて思えやしないわ。ねえ。何ほ何でも……。

だけど、妾それから溫柔わしなしくしてヤングの話を聞いていたら、それがだんだん本当らしくなつて来たから不思議なのよ。亜米利加の女つてものはそんな遊びにかけちや男よりもズツト気が強いんですってさあ。亜米利加の男や女に独身生活ひとりもの者が多いのは、そんな遊びのステキな気持ちよさを知っているからで、そんな人達に、方々から誘拐かどわかして来た、美しい男や女を当てがつて、いろんなステキな遊びをさせる倶楽部くらぶだの、ホテルだのいうものが、大きな街に行くとキットどこかに在るんですってさあ……つまりお金さえあれば、ドンナ事でも出来るのが亜米利加の風ふうだつていうのよ。だから恋愛の天国つていえば、今の世界中で亜米利加よりほかに無いってヤングは自慢していたわ。

……でもね……その中でたった一つ、ドンナお金持ちでも滅多に出来ない、一番ステキ

な、一番贅沢な、取つときの遊びがあるつていうのよ。ねえ……面白いでしょう……それはねえ。今云つたようにお金ずくで出来るいろんな素敵な遊びにも飽きてしまつて、どうにもこうにも仕様しやうがなくなつた人の中の一人か二人かがやつて見たくなるステキなステキな、この上もない無鉄砲な遊びで、それこそホントにお金ずくでは出来ない生命いのちがけの愉快な遊びなんですつてさあ……そう云つたらあんたはわかるでしょう。その遊び方が……え……わからないつて……まあ……

……だつてその遊びの本家本元は日本だつてヤングはそう云つたのよ。世界中のどこにも無くて日本にだけ昔から流行はやつているのを、この頃亜米利加の学者たちが大騒ぎをして研究を始めているので、トテモ有名な遊びなんですとさあ……そう云つてもわからない？……まあ……じゃもつと云つて見ましようか。

ヤングはそう云つたのよ。日本の芸術つてものは何でもかんでも世界中の芸術の一番いいとこばかりを一粒選えりにして集めたものなんですつてさあ……イイエ、オベツカじゃないのよ。ヤングがそう云つていたんだから……妾なんか解らないけど……だから日本では恋愛の遊びだつて、ほかの色んな遊びの仕方は、もうすっかり流行はやり廃すたっている代りに、その一番ステキなのがタツタ一つだけ、今でも残っているんですつて。一つは日本人はお

金をそんなに持たないから、ほかのお金のかかるのはみんな諦らめてしまつて、その一番ステキなのだけで満足しているのかも知れないつて云うのよ。それをこの頃になつて亜米利加の学者たちが八釜やかましくいつて研究しているけども、それはただ学問の研究だけで、本当にやつて見ようなんていう度胸のある人間は、まだ一人も亜米利加に出て来ないんですつてさあ……そんなステキな遊びが日本に在るのをあんた知らない……マア……そんな筈はないわ。ヤングは学者だから嘘なんか吐きやしないわよ。あんたは知っているけど気が付かないでいるのよ。日本ではそんなに珍らしくないから……。

……エ？……その遊びの名前ですつて……それを妾スツカリ忘れちゃつたのよ。イイエ本当よ……今に思い出すかも知れないけど……おぼえているのはその遊びの仕方だけよ。それあトテモ素敵な気持ちのいい遊び方で、聞いただけでも胸がドキドキする位よ。何でも亜米利加の言葉で云うと「恋愛遊びの行き詰まり」つていったような意味だったわよ。日本の言葉で云うと、もつと短かい名前だったようだけど……え？……その遊びの仕方を云つてみろつて？……厭いや々。……それは妾わぎつと話さないでおくわ。あんたが思い出さなければ丁度いいからね。おしまいの楽しみに取つとくわよ。……ええ……今夜は妾はトテモ意地悪よ。ホホホホホ。

……でも、そんな話を初めて聞いた時には、妾わたくしもうビックリしちやって髪毛かみのけをシツカリと掴みながらブルブル慄ふるえて聞いていたようよ。その頃の妾は今よりもズツと初心うぶだったもんですからね……そんな話を平気でいいし、青い顔をしてお酒を飲んでいるヤングの軍服姿が、だんだん恐ろしいものに見えて来て、今にも妾を殺すのじゃないか知らんと思ひ思い、その高い薄っぺらな鼻や、その両脇くわに凹くぼんでいる空色の眼や、綺麗に真中まんなかから分けた栗色の髪毛かみを見つめていたようよ。何だか悪魔と話しているような気がしてね……。

だけど、そのうちにヤングから、そんな遊びの仕方を、一番やさしいのから先にして一つ一つに教おそわって行くうちに、妾はもう怖くも何ともなくなってしまったのよ。……え……それあ本当の事はどうせ亜米利加アメリカの本場に行つて、色んな薬や器械を使わなくちや出来ないのが多かったし、一番ステキな日本式の遊びや、そのほかの生命いのちがけの遊びは相手が無いから、只真似方まねかたと話だけですましたの。妾の身体からだに傷が残るようなのも店の主人に見つかるの大変だから、ヤングと一緒に亜米利加に行つて結婚式を挙げてからの楽しみに取つていたけど、ほかのは大抵卒業しちやつたのよ。……それも初めのうちは、妾がヤング

からいじめられる役で、首をもうすこしで死ぬとこまで絞められたり、縛って宙釣りにされたり、髪かみ毛けだけで吊るされたりして、とても我慢出来ない位、苦しかったり痛かったりしたのよ。だけどそのうちにだんだん慣れて来たら、その痛いのや苦しいのが眼のまわるほどよくなつて来てね……妾があんまり嬉しそうにして涙をポロポロ流したりするものだから、おしまいにはヤングの方が羨ましがって、いつも持っている小さな鞭むちを妾に持たして、それで自分の背中を思い切り打ぶつてくれつて云い出した位よ。

ええ……妾思い切り打つてやったわ。ヤングなら背中に鞭の痕きずが付いていても誰も気付かないでしょうし、妾も自分でいじめられる気持ちよさを知っていたんですからね……イイエ、音なんかいくら聞こえたつて大丈夫よ。妾ヤングから教おそわつた通りに吞のん氣きそうに流は行やり歌うたを唄いながら、その調子に合わせて打ぶつていたから、外から聞いたつて何かほかのものをたたいているとしか思えなかつた筈よ。……でも、そうして寝台の上に長くなっているヤングの脂あぶら切ぎつた大きな背中を、小さな革かわの鞭で、力一パイにたたいている間の気持ちのよかつたこと……打てば打つほどヤングが可愛いくなつて来てね……そうしてもう、ヤングと一緒に亜米利加アメリカへ行つたら、そんな遊びが本式に大ピラで出来ると思うと、楽しみで楽しみでたまらなくなつちやつたの。だから……妾は毎晩そんな遊びをする時間をす

こしずつ裂^さいて、ヤングを先生にして一生懸命に亜米利加の言葉を勉強し続けたのよ。

妾は言葉を覚えるのが名人なんですってさあ。ヤングがビックリしていた位よ。ヤングとこんな話が出来ようになる迄では一と月とかならなかつたし、水兵さん達と悪態のつきつこをする位の事なら、初めつから訳なかつたわ。おしまいにはヤングがよくポケットに入れて持つて来る英^{アングリウス}字^{ユガゼド}新聞^ガが、すこしずつ読めるようになったから豪^{えら}いでしょう。自分の国の字だと聖書もロクに読めないのによ。ホホホホホホ。だって妾の両親はトテモ貧乏で、妾を学校に遣^やる事が出来なかつたんですもの……お化粧の道具なんかも、両親から買ってもらった事は一度も無かつたのよ。だけどこの時ばかりは学者の奥さんになるのだからと思つて、ずっと前から欲しくてたまらなかつた型の小さい、上品なのを別に買つて、バスケットの底に仕舞^{しま}つておいたわ。ええ。それあ嬉しかつたわよ。だってどうせ両親に売り飛ばされて、こんな酒^{レストラン}場の踊り子になっている身の上ですもの……おまけに生れて初めて妾を可愛がつてくれて、色んな楽しみを教えてくれたのが、そのヤングなんですもの……その頃の妾は今みたいな、オシャベリの女じやなかつてよ。どんな男を見ても怖ろしくて気味がわるくて、思うように口も利けない中に、たった一人そのヤングだけが怖くなかつたんですもの……アラ……御免なさいね。^{なみだ}泪なんか出して……妾

……男の方の前で、こんな事を云つて泣くのは今夜が初めてよ。ネ……笑わないでね。

そうしたら……そうしたらね、ちょうどあと月だから十月の末の事よ。ヤングがいつに
なく悄気^{しよげ}た顔をして這入^{はい}つて来て、この室^{へや}で妾と差し向いになると、何杯も何杯もお酒を
飲んだあげくにシヨボシヨボした眼付きをしながら、こんな事を云い出したの……。

「可愛い可愛いワーニヤさん。私はいよいよあなたとお別れしなければならぬ時が来まし
た。あなたを亜米利加へ連れて行く事も思い切らなければならぬ時が来ました。私は明日^{あす}
の朝早く、船と一緒に浦^{うら}塩^{しお}を引き上げて布哇^{ハワイ}の方へ行かなければなりません。そうして
日本と戦争を始めなければなりません。そうなたら私は戦死をするかも知れないし、あ
なたを連れて行く訳にも行かなくなりました。昨夜不意打ちに本国からの秘密の命令が来
たので、どうする事も出来ないのです。……しかしもしも戦争が済むまで私が死なないで
いたらキツト貴女^{あなた}を連れに來ます。ですから何卒^{どうぞ}今度はばかりは諦めて下さい」

……つて……そう云っているうちに、ポケットからお金をドツサリ詰めた革袋を出して、
妾の手に握らせたの。

妾、その革袋を床の上にたたき付けて泣いちゃったわ。

「そんな事は嘘だ」

つて云つてね。それあ日本が亜米利加と戦争を初めそうだっていう事は、ズット前から聞いているにはいたけれども、ヤングの話はあんまりダシヌケ過ぎて、どうしても本当とは思えなかったんですもの。だから、

「あんたは妾を捨てて行こうとするのだ。何でもいいから妾はあんたを離れない。一緒に軍艦に乗って行く」

……つて云つて死ぬ程泣いて泣いて泣いて泣いて何と云つても聴かなかったの。しまいには首ツ玉に獅^し噛^がみ付いて、片手で軍服のポケットをシツカリ掴んで離さなかったの……。ヤングは本当に困っていたようよ。軍服の肩の処に顔を当ててヒイヒイ泣きじやくつている妾を膝の上に抱き上げたまま、暫らアクジツとしていたようよ。けれどもそのうちにフイツと何か思^{おも}出^{いだ}したように私の顔を押し離すと、私の眼をキツト睨^{にら}まえながら、今までと丸で違った低い声で、

「ワーニヤさん。いい事がある」

つて云つたの。私はその時、何だかわからないままドキンとして泣き止みながらヤングの顔を見上げたら、ヤングは青白——イ、気味の悪い顔になって、私の眼をジ——イと覗

き込みながらソロソロと口を利き出したのよ。前とおんなじ低い声でね……。

「ワーニヤさん。いい事がある。貴女あなたがそれ程までに私の事を思ってくれるのなら、一つ思いい切った事を遣やつつけてくれませんか。私が今から海岸の倉庫へ行つて大きな麻の袋を取つて来ますから、その中へ這入つてくれませんか。毛布を身体からだに巻きつけておけば、人間だか荷物だかわからないし、寒くもないだろうと思いますから、そうして私の荷物に化けて軍艦に来て物置の中に転がっていてくれませんか。そうすれば、そのうちに私がうまく父親の司令官に話して、貴女を士官候補生の姿にして、私の化粧室に住まわせてあげますから……その話が出るまで三度三度の喰べ物は、私が自分で持つて行つて上げます。随分窮屈つらで辛いでしょうけれども、暫くの間と思いますから辛しん棒ぼうしてくれませんか」

……つて……ネエあんたどう思つて……トテモ、ステキな思い付きじゃないの……イイエ、ヤングは本気で、そう云つていたのよ。妾だまを欺だましていたんじゃないの。もうすこし先までお話するとわかるわ……ええ今話すわよ。話すからもう一杯飲んで頂戴……曹達そうだを割つて上げるからね……。

妾わたし、この話を聞くと手をタタイて喜んじやつたわ。だって今までに活動や何かで見たり

聞いたりした「恋の冒険」の中のどれよりもズツ素敵じやないの。女の児が支那米の袋に這入って、軍艦に乗って戦争を見物に行くなんて……ねえ……妾あんまり嬉しかったもんだから、思い切りヤングに飛び付いてやったわ。そうして無茶苦茶にキスしてやったわ。ヤングも嬉しそうだったわよ。今までになく大きな声を出して歌を唄ったりしてね。そうして妾に、

「……それではドツサリお酒を飲みながら待つていて下さい。今夜は特別に寒いようだから、袋の中で風邪を引かないようにね。私はこれから袋を取りに行つて来ますから」

つて、そう云ううちに帽子を冠かぶつて外套を着て、どこかへ出て行つてしまったの。

妾、そんな時に一寸心配しちやつたわ。ヤングがそのまんま逃げて行つたのじやないかと思つてね……だけど、それは余計な心配だったのよ。ヤングは間もなくニコニコ笑いがら歸つて来て妾の顔を見ると、

「……おお寒い寒い……一寸、その呼鈴ベルを押して主人を呼んでくれませんか」

つて云つたの。妾、ヤングの足があんまり早いのでビックリしちやつてね。

「まあ……今の間まにもう海岸まで行つて来たの……そうして袋はどこに持つて来たの……」
つて聞いたらヤングは唇に指を当てて青い眼をグルグルまわしながら妙な笑い方をした

の。

「シツ……黙っていらつしやい……近所の支那人に頼んで外に隠しておいたのです。今にわかりますから……」

つてね……そう云ううちに主人が這入つて来たら、ヤングはいつもの通りその晩妾を買い切りにして、お料理やお酒をドンドン運び込ませて、妾に思い切り詰め込ましたのよ。……途中でお腹が空か^すないようにね……そうして主人にはドツサリチツプを呉^くれて、面^{めんく}喰^くつてピヨコピヨコしている 禿^{はげ}頭^{あたま}を扉^{ドア}の外へ閉め出すとピツタリと鍵をかけながら、
「明日^{あす}の朝十時に起してくれエツ」

……て大きな声で怒鳴^{どな}つたの。そうしておいて妾の手をシツカリと握つたヤングは、あの窓を指さしながらニヤニヤ笑い出したのよ……。

妾ヤングの伶俐^{りこう}なのに感心しちやつたわ。あの窓はその時まで、もっと大きな二重硝子^{ガラス}になつていて、その向うには、あんな鉄網^{かなあみ}の代りに鉄の棒が五本ばかり並んでいたんだけど、その硝子窓^{ガラス}を外^{はず}して、鉄の棒のまん中へ寝台^{ベッド}のシートを輪にして引っかけて、その輪の中へ突込んだ椅子の脚を壁のふちへ引っかけながら、二人がかりでグイグイと引っぱると一本一本にみんな抜けちやつたの。……ええ……電燈を消していたんだから外から見

たつてわかりやしないわ。……その穴からヤングが先に脱け出して、あとから這い出した私を抱え卸してくれたの。

それは浦塩ここいら附近に初めて雪の降った晩で、あの屋根の白い斑まだら雪ゆきもその時に積んだまんななのよ。風は無かったようだけど星がガラガラしていてね……その横路地に白い舞踏服姿の妾が、寝台ベッドから取つて来た白い毛布にくるまってガタガタに寒くなりながら立っていると、ヤングは大急ぎで、向家の横路地の間から、隠しておいた支那米の袋を持って来て妾の頭の上からスポリと冠せてくれたの。そうしてそのまんま地びたの上にソツと寝かして、足の処をシツカリとハンカチで結ゆわえるとヤットコサと荷かつぎ上げながら、低い声でこんな事を云つて聞かせたのよ。

「さあ……ワーニヤさんいいですか。暫くの間辛いでしょうけども辛棒して下さい。私がもう宜しいって云うまでは、決して口を利いたり声を立てたりしてはいけませんよ」

つてね……。だけど妾は、その袋があんまり小さくて窮屈なのでビツクリしちゃったわ。妾の身体からだは随分小さいんだけど、それでも足を出来るだけグツと締めなければ袋の口が結ばらないのですもの。おまけにその臭かったこと……停車場のはばかりみたいな臭いがしてね。ホコリ臭くて息が詰りそうで、何なん遍も何遍も咳せきが出そうになるのをジツと我慢し

ているのがホントに苦しかったわ。

それからどこを通って行つたのか、よくわからないけど、何でもこのスウェツランスカヤから横路地伝いに公園の横へ出て、公使館の近くを抜けながら海岸通りへ出たようなの。途中で下腹や腰のところがヤングの肩で押えられて痛くてしやうがなかったけど、やつとの思いで我慢していたわ。ええ。それあ怖かったわ。ヤングが時々立ち止まるたんびに誰か来たのじゃないかと思つてね……。

海岸来るとヤングは、そこに繋いであつた小さい舟に乗り込んで、妾をソツと底の方へ寝かして、その上に跨^{また}がつて自分で櫂^{かい}を動かし始めたようなの……そこいらは、まだ暗くて、波の音がタラリタラリとして、粗^{あら}い袋の目から山の手の燈火^{あかり}がチラリチラリと見え
てね……妾は息が苦しいのも、背中が痛いのも、それから足を伸ばしたくてたまらないのも忘れて、時々聞える汽笛の音に耳を澄ましながら胸をドキドキさせていたわ。これが故郷のお別れと思つてね……そうかと思うと亜米利加^{アメリカ}の町をヤングと連れ立って散歩している自分の姿を考えたり……ヤングと妾の幸福のために、イーコン様にお祈りを捧げながら、ソツと小さな十字架を切つたりしていたわ。

そうすると間もなく、今までと丸で違つた波の音が聞え出して、小舟が軍艦に横付けに

なつたようなの。その時に妾は又ドキンとして荷物のつもりで小さくなっていると、こつちからまだ何も云わないのに、上の方から男の足音が二人ほど、待っていたようにゴトゴトと音を立てて降りて来たの。そうしてその中の一人が低い声で、

「へへへへへ。今までお楽しみで……」

つて云いかけたら、ヤングが同じように低い声で、

「シッ。相手は通じるんだぞ……英語が」

つて叱つたようよ。そうすると二人ともクツクツ笑いながら黙り込んで、妾の袋をドッコイシヨと小舟の中から抱え上げたの。

その時に妾はチョット変に思わないじゃなかったわ。何だか解らないけど、その二人の男の抱え方が、袋の中に生きた人間が居るつて事をチャンと知っているとしか思えなかつたんですもの。一人は妾の肩の処を……それから、もう一人は腰の処を痛くないようにソーツとネ……だけどこれは大方ヤングが今の間に手真似か何かで打ち合わせたのかも知れないと思つているうちに、一度階段を降り切つた二人の足音は又、別の段々を降り始めて、今度は波の音も何も聞えない、処々に電燈のついた急な階段を二ツばかり降りて行つたの。その時にヤングは、もうどこかへ行つていたようよ。……いいえ船の中はシンとしてい

たけど、いつヤングが消えてしまったのか解らなかったわ……まあそう……出帆前つてそんなに忙がしいものなの……じゃ矢つ張りあんたの云うように、あの軍艦はずつと前から出発の準備をして命令が来るのを待っていたんだわ。ね……そうでしょう……ヤングが出帆の日を知らなかったのは無理もないわ。そうして本当に日本と戦争をする気で出て行っただけど、途中で日本が怖くなつたから止しちやつたんでしよう。……アラ……どうしてそんなに失笑すの。

イイエ、あんたがいくら笑つたつてそうに違いないわよ。だってヤングはおしまいまで一度も嘘を吐いた事なんぞ無かつたんですもの。妾がヤングに欺されているように思うのはソレアあんたの嫉妬よ……まあいいから黙つてお酒を飲みながら聞いていらつしやい。あんたの気もちはよくわかつているんだから。もつとおしまいまで聞いて行くうちには、ヤングが云つた事が本当か嘘かわかるから……ね……。

……そうしたらね……。

そうしたら、あとに残つて妾を抱えている二人の足音が又一つ、急な段々を降りて行く、どこか遠い処に黄色い電燈がたつた一つ点つている、暗い、板張りらしい処に來たの。それと一緒に二人の男は、イキナリ妾を固い床の上にドシンと放り出したもんだから妾は

思わず声を立てるところだったわ。だけど又それと一緒に、これはどこか近い処に人間が居るからで、妾を荷物と見せかけるために、わざとコンナ乱暴な真似をしたのに違いないと気が付いたの。それでやつと我慢して、放り出されたなりにジツとしていたら、そのうちに誰も居なくなつたのでしよう。二人の男は大きな声で話をしいしいユツクリユツクリと室^{へや}を出て行つたの。

「アハハハハハ。もう大丈夫だ。泣こうが喚^{わめ}こうが」

「ハハハハハハ。しかしヤングの智恵には驚いちやつたナ。露^ロ西^シ亜^アの娘つ子なんて、コンナに正直なもんだあ思わなかつたよ」

「ウーム。こんな素晴らしい思い付きは、彼奴^{あいつ}の頭でなくちや出て来つこねえ。何しろ革命^{のち}から後^{のち}つてもものあ、どこの店でも摺^すれつ枯^からしを追い出して、いいとこのお嬢さんばかりを仕入れたつていうからな……そこを睨^{にら}んだのがヤングの智恵よ」

「成る程ナア……ところでそのヤングはどこへ行きやがつたんだろう」

「おやじん^{とこ}処^{とこ}へ談判に行つたんだろう。生きたオモチャをチツトばかり持込んでいいかつてよ」

「……ウーム。しかしナア……おやじがうまくウンと云えあ^い良^いが……」

「それあ大丈夫よ。それ位の智恵なら俺だつて持つている。つまり時間が来るまでは、他の話で釣つといて、艦ふねの中を見まわらせねえようにしとくんだ。そうしてイヨイヨ動き出してから談判を始めせえすれあ、十が十までこつちのもんじゃねえか。……まさか引つ返す訳にも行くめえしき」

「ウム。ナアルホド。下手を間誤まごつ付けあ、良い恥はじ晒さらしになるつてえ訳だな」

「ウン……それにおやじだつて万まんざら更まじやねえんだかんナ……ヤングはそこを睨にらんでいるんだよ」

「アハハハハ違ちがえねえ。豪えれえもんだなヤングつて奴は……」

「アハハハハハハハ」

「イヒヒヒヒヒヒ」

……妾めかけこんな話をきいているうちにハッキリと意味はわからないまま、もうスツカリ大丈夫なような氣になつて、グーグー睡ねつてしまったのよ。

ええ……それあ大胆といえは大胆なようなもんよ。だけど、その時の妾はもう大胆にも何にも仕様しようのない位へトへトに疲れていたんですもの。最前からオブラーコで飲んだお酒の酔いと、今まで苦しいのを我慢していた疲労つかれが一時いちじきに出ちやつて、いつ軍艦が出帆の

笛を吹いたか知らないまんまに睡っていたわ。

だけど、そうして眼が醒めてからの苦しくて情なかった事……軍艦の器械のゴットンゴットンという響きが身体に伝わるたんびに、毛布ごしに床板に押しつけられている背中と、腰骨と、曲ったまんまの膝つ節とが、まるで火が付いたように痛むじやないの。妾はもう……早くヤングが来てくれればいい。そうしたら水か何か一パイ飲ましてもらわなくちゃ、咽喉のどがかわいて死ぬかも知れない。そうしてモット大きな袋に入れてもらわなくちゃ……と、そればかり考えていたわ。そうして人にわからないように少しずつ寝がえりをしかけていると、不意に頭の上で誰かが口を利き出したので、妾は又ハツとして亀の子のように小さくなってしまったの……それは何でも三四人の男の声で、妾のすぐ傍に突立つたって、先刻さつきから何か話していたらしいの……。

「まだルスキー島はまわらねえかな」

「ナニもう外海そとうみよ」

「……ワン。ツー。スリー。フォーア……サアテン。フォテン……おやア……一つ足りねえぞこりやア……フォテン。ファイテン。シックステン……と……あつ。足下あしもとに在ありやがった。締めて十七か……ヤレヤレ……」

「……様と一緒なら天国までも……って連中ばかりだ」

「惜しいもんだなあ……ホントニ……おやしええウンと云えあ、布哇^{ハワイ}へ着くまで散々^{さんざん}ぱら蹴たおせるのになア」

「馬鹿野郎。布哇^{ハワイ}クンダリまで持つて行けるか。万一見つかって世界中の新聞に出たらどうする」

「ナアニ。頭を切らして候補生の風^{ふう}をさせとけあ大丈夫だって、ヤングがそう云つてたじやねえか」

「駄目だよ。浦^{うら}塩^{しお}の一粒^え選りを十七人も並べれあ、どんな盲目^{めくら}だって看破^{みやぶ}つちまわア」

「それにしても惜しいもんだナ。せめて比律賓^{ヒリッピン}までも許してくれるとなア」

「ハハハハまだあんな事を云つてやがる。……そんなに惜しけあ、みんな袋ごと呉れてやるから手前^{てまえ}一人で片づけろ。割り前は遣らねえから」

「ブルブル御免だ御免だ」

「ハハハ見やがれ……すけべえ野郎……」

そんな事を云い合っているうちに一人がマッチを擦^すつて葉巻に火を点^つけたような。間もなく美しい匂いがプンプンして来たから……。

だけど妾はそのにおいを嗅ぐと一緒に頭の中がシーンとしちゃったの。身体が石みたように固くなつて息も吐けない位になっちゃったの。……だって妾みたようにしてこの軍艦に連れ込まれた者は、妾一人じゃないことが、その時にやっとわかりかけて来たんですもの……。妾のまわりにはまだ、いくつもいくつも支那米の袋が転がっているらしいんですもの……。おまけに、それをどうかしに來たらしい荒くれ男が三四人、平気で冗談を云い合いながら葉巻を吹かしているじゃないの……。あんまり恐ろしい、不思議な事なので、妾は、あと先を考える事も何も出来やしなかったわ。ただ眼をまん丸に見開いて鼻っ先に被さっている袋の粗い目を凝視ながら、両方のお乳を痛いほどギュツと掴んでいたわ……。夢じゃないかしらと思つて……。

でも、それは夢じゃなかったの……。そうして齒を喰い締めて、一心に耳を澄ましていると、ゴットンゴットンという器械の音の切れ目切れ目に、ドド——ンドド——ンつていう浪の音が、どこからか響いて来るじゃないの。……ええ……。おおかた外の女達も妾とおんなじにビツクリして小さくなっていたんでしょう。呼吸をする音も聞えない位シンとしていたようよ。

そうしたら又その中に、その葉巻を持つているらしい男が、一としきりスパスパと音を

立てて吸い立てながら、こんな事を云い出したの。

「待て待て。片づける前に一ツ宣告をしてやろうじゃねえか。あんまり勿^{もつてえ}体ねえから」

「バカ……止せつたら……一文にもならねえ事を……」

「インニヤ。このまま片づけるのも芸のねえ話だかなナ……エヘン」

「止せつたらヂツク……そんな事をしたら化けて出るぞ」

「ハハハハ……化けて出たら抱いて寝てやらあ……何も話の種だ……エヘンエヘン」

「止せつたら止せ……馬鹿だなあ貴様は……云つたつてわかるもんか」

「まあいいから見てろつて事よ……これあ余興だかなナ……俺の云う事が通じるか通じないか……」

つて云ううちに、そのヂツクつて男は、又一つ咳払いをしながらハッキリした露^{ロシ}西^ア亜^語で演説みたいに喋^{しゃべ}り出したの。

「エヘン……袋の中の別^{べつ}嬪^{びん}さんたち。よく耳の垢^{あか}をほじくつて聞いておくんなハイよ。

いいかね。……お前さん達はみんな情^{いひ}人と一緒になりたさに、こんな姿に化けてここへ担^かぎ込まれて来たんだらう。又……お前さん達の情^{いひ}人も、おんなじ料簡で、お前さん達をここまで連れて来たんで、決して悪気じゃなかったんだらうが、残念な事には、それが

出来なくなつちやつたんだ。いいかい……だからね。……エヘン……だから怨むならばだ……いいかい……怨むならば、お前さん達の情人いいひとにこんなステキな智恵を授けた、ヤングという豪い人えらいを怨まなくちやいけないんだよ。……それからもう一人……この艦ふねに乗っている俺たちの司令官たいしやうを怨みたけあ怨むがいいってんだ。……イヤ……事によると、その司令官たいしやうだけを怨むのが本筋かも知れないがね……どっちにしても、お前さん達のいい人や、そんな連中に頼まれた俺達を怨んじやいけないよ。いいかい……という訳はこうなんだ。先刻さつきヤングさんが司令官たいしやうに、お前さん達を亜米利加アメリカまで連れてつていいかって伺いを立ててみたら、亜米利加の軍艦の中には、食料品たべものより以外ほかに肉類にくを一切置いちゃイケナイつてえ規則になつているんだツてさあ……だからね……折角せつかくここまで来ているのをホントにお気の毒でしようがないけど、ちょうど風も追い手のようだから、お前さん達はその袋のまんま、海を泳いで浦塩うらしおの方へ……」

ここまでその男が饒舌しゃべつて来たら、あとは聞えなくなつちやつたの。だって妾のまわりに転がつている十いくつの袋の中から、千切ちぎれるような金切声が一どきに飛び出して、ドタンバタンとノタ打ちまわる音がし始めたんですもの。中には聞いたような声がいくつもあつたようだけど、そんな時に誰が誰だかわかりやしないわ。ただ耳が潰れるほどキーキ

ーピーピー云うだけですもの。

だけど私は黙っていたの。声を出すより先にどうかして、袋を破いてやろうと思って、一生懸命に藻搔もがいていたの。だけど袋が小さい上にトテモ丈夫に出来ているので、噛み付こうにも噛み付けないし、力一パイ足を踏ん張ると首の骨が折れそうになるし、その苦しさをたならなかったわ。だけど、それでも生命いのちがけの思いで、力のありったけ出して藻搔もがいているうちに、妾のまわりの叫び声が一ツ一ツに担づつぎ上げられて、四ツか五ツ宛行列を立てながら階段を昇りはじめたの。その時にはチョツトの間まみんなの叫び声は止んだようだけど、その階段の音が聞えなくなると、又前よりも非道ひどい泣き声や金切声がゴチャゴチャに聞え始めたの。めいめいに男の名を呼んでヒイヒイ泣いていたようよ。

だけど妾それでも泣かなかつたの。そうして死に物狂いになって、両手で頭をシツカリと抱えながら、足の処の結び目を何度も何度も蹴ったり踏んだりしていたら、身体からだ中が汗みどろになって、髪かみ毛が顔中に粘り付いて、眼も口も開けられなくなってしまったの。

その中うちに袋の中は湯気が一パイ詰まったように息苦しくなつて来るし、髪の毛は顔から二の腕まで絡まって、動きたんびにチクチク抜けて行くし、おまけに着物と毛布が胸の上の処でゴチャゴチャになって、袋の中一パイにコダワリながら、お乳を上へ上へと押し上げ

るので、その苦しきつたら……もう死ぬかももう死ぬかと思つた位よ。そうしてそのうちに……御覧なさい。この臂ひじの処が両方ともこんなに肉が出てピカピカ光っているでしょう。この臂はヤングが「猫キヤツエルの臂ボウ」つて名をつけて、紐ニューヨーク育婦人の臂くらべに出すつて云つていたくらい柔らかくてスンナリしていたのが、知らないうちに擦すり破れてしまつて、動くたんびにヒリヒリと痛み出して来たんですもの。……それに氣が付くと妾はもう、スツカリ力が抜けてしまつて、意地にも張りにも動けなくなつたようよ……両方の臂を抱えてグツタリとなつたまま、呼吸いきばかりセイセイ切らしていたようよ。

そのうちに又、上の方から四五人の足音が聞えて来ると、みんなの叫び声がまた、ピツタリとなつちやつたの。それに連れて降りて来る男たちの話声がよく聞えたのよ。器械の音とゴツチャになつたまま……。

「アハハハハ。非道ひでえ眼に会つちやつたナ。あとでいくらかヤングに増してもらえ」

「ヂツクの野郎が余計な宣告を饒舌しゃべるもんだから見ろ……こんなに血が出て来た」

「ハハハハ恐ろしいもんだナ。袋の中から耳みみたば朶ちぎを喰い切るなんて……」

「喰い切つたんじやねえ。引き千切りかけやがつたんだ。だしぬけに……」

「俺あ小便を引つかけられた。コレ……」

「ウワ——。あれあスチューワードが持ち込んだ肥^{ふと}つちよの娘だろう。彼奴^{あいつ}の鞭^{むち}で結^{ゆわ}えてあつたから……」

「ウン。あのパン屋のソニーさんよ。おかげで高価^{たけ}え銭^{ぜに}を払つたルパシカが台なしだ。とても五弗^{ドル}じゃ合^あわねえ」

「まあそうコボスなよ。女の小便^{えんぎ}なら縁起^{えんぎ}が宜^いいかも知れねえ」

「人をつけ……ウラハラだあ……」

「ワハハハハハ」

……だつてさあ……こんな事を云い合つて吞氣^{のんき}そうに笑いながら、その男たちは又四ツばかり叫^{おと}び声を担^おぎ上げたの。

「サア溫柔^{おとな}しく溫柔しく。あばれると高い処から取り落しますよ。落ちたら眼の玉が飛び出しますよ」

「小便なんぞ引つかけないように願いますよだ。ハハハハハハ」

「ドッコイドッコイ……どうでえこの腹部^{ポツポ}のヤワヤワふつくりとした事は……トテモ千^{せんき}金^んこてえられねえや」

「アイテツ。そこは耳^{みみたば}朶^ぼじゃねえつたら……アチチチ……コン畜生……」

「ハハハハ。そこへ脳天を打つ付けねえ。その方が早えや」

「アイテテ……又やりやがったな……畜生ッ……こうだぞ……」

つて云ううちに、……ギャッて云う声が室^{へやじゅう}中にビリビリする位響いて来たの。

その声を聞くと妾は又夢中になつてしまつて、身体中^{からだ}にありたけの力を出しながら、床の上を転がり始めたの。そうして出来るだけ電燈の光りの見えない方へ盲目^{めくらさぐ}探りに転がつて行つて、何かの陰を探して隠れようとしていたの。そうすると今度は男たちの靴の音が離れ離れになつて、一人か二人宛^{ずつ}あとになつたり先になつたりしながら——次から次に担ぎ上げて行くうちに、とうとう、室^{へや}の中の叫び声が一ツも聞こえなくなつてしまつたのよ。ただ軍艦の動く響きと、微かな波の音ばかり……人間の居るらしい音は全く無くなつてしまつてね……。

その時に妾はやつと、すこしばかり溜息をして気を落ちつけたようよ。妾の袋はキット何かの陰になつて、見えなくなつてゐるのに違ひないと思ひ思い、顔中にまつわつてゐる髪の毛を掻き除^のけながら、なおも、ジツと耳を澄ましていたようよ。

そうすると、それから暫く経つて、もうみんなどこかへ行つて終つた^{しま}と思う頃、今度はたった一人の、重たい、釘だらけの靴の音が……ゴトーン、ゴトーンと階段を降りて来た

の。そうして室のまん中に立ち止まって、そこいらをジーイと見まわしながら突立つてい
 るようなの。

……その時の怖かったこと……今までの怖さの何層倍だったか知れないわ……妾の寿命
 はキツトあの時に十年位縮まったに違いないわよ。……もう思い切り小さくなって、いつ
 までもいつまでも息を殺していると、そこいら中があんまり静かなのと、気味がわるいの
 とで頭がキンキン痛み出して、胸がムカムカして吐きそうになって来たの。それを我慢し
 よう我慢しようと藻搔もがいていたために身体からだじゆうが又、冷汗でビツシヨリになってしまっ
 たの。

そうすると、もうどこかへ行つたのか知らんと思つていたその男が馬鹿みたいにノロノ
 ロした、変テコな胸間どうまへ声で口を利き出したの。

「……どうしても一ツ足りねえと思うんだがナア……みんなは、おらが三人担いだとい
 うけんど、おらあ二遍しけあ階子段はしごだんを昇らねえんだがなあ……」

その声と言葉付きを聞いた時に、妾は又、髪の毛が一本一本馳け出したように思つたわ。
 齒の根がガクガク鳴り出して、手足がブルブル動き出すのをどうする事も出来なかつたわ
 ……だつてその声っていうのは、ずっと前に一度オブラーコの酒場レストランへ遊びに来て、散

んざつ
々パラ水兵たちにオモチャにされて外に突き出された、大きな嫌らしい黒ん坊の声だったんですもの。……その時にその黒ん坊が恨めしうらな、もの凄い眼付きで妾たちをふり返った顔を、袋の中でハッキリと思い出したんですもの……怖いにも何にも、妾は生きた空がなくなつて、もうすこしで氣絶しそうになった位よ。今にもゲーツと吐きそうになつてね。そうするとその黒ん坊は、

「どうしても無いんだナア……可笑しいナア……」

つて云いながらマツチを擦つて煙草を吸い付け吸い付け出て行きそうに歩き出したの。……そんな時の嬉しかったこと……妾は思わず手の甲に爪が喰い入る程力を籠めてイーコン様を拝んじやつたわ。

……だけど矢つ張り駄目だったの……階段の方へノロノロと歩いて行つた黒ん坊は間もなく奇妙な声を立てながらバツタリと立ち止まったの。

「イヨーッ。あんな処に隠れてら。フヘ、フヒ、フホ、フム……畜生畜生」

と云うなり、ツカツカと近づいて来て、妾の袋へシツカリと抱き付いちやつたの。それと一緒に黄きなくさ臭い煙草のにおいと、何ともいえない黒ん坊のアノ甘つたるい体臭においとがムウーと袋の中へ流れ込んで来たようなの。

妾、その時に、どんな風に暴れまわったか、ちつとも記憶おぼえていないのよ。……ただ、ちつとも声を立てなかった事を記憶おぼえているだけよ。誰か加勢に來たら大変と思ってね。……だけどその黒ん坊も、ウンともスンとも云わなかったようよ。おおかた一人で妾をどこかへ担いで行つて、どうかしようと思つたのでしょうか。暴れまわる妾を何遍も何遍も抱え上げかけては、床の上に取り落し取り落したので、そのたんびに妾は氣が遠くなりかけたようよ。

だけど、それでも妾は声を立てなかったの。そうしてヤツサモツサやっているうちに、どうした拍子か袋の口が解けて、両足が腰の処までスツポンと外へ脱ぬけ出した事がわかつたの……。

それに氣が付いた時に妾がどんなに勢よく暴れ出したか……アラ又……笑つちや嫌いやつて云うのに……ソレどころじゃなかったわよ、ソンの時の妾は……何でもいいから……足が折れても構わないからこの黒ん坊を蹴殺して、その間に袋から脱け出してやろうと思つて、頭でも、顔でも、胸でもどこでも構わずに蹴つて蹴つて蹴飛ばしてやつたわ。……ええ……黒ん坊も一生懸命だったようよ。袋の上からシツカリと組み付いて来て、片っ方の手で妾の両足を押えようとするのだけでも、妾の両足を一緒に掴まえる事はなかなか出来ない

し、片つ方だけ捉^{つか}まえても妾が死に物狂いで蹴飛ばしてやったもんだから、しまいにはセイセイ息を弾^{はず}ませて、妾の足と掴み合い掴み合いしながらあっちへ転がり、こっちへ蹴飛ばされしていたようよ。……だけど、そのうちに妾の着物と毛布が両手と一緒に、だんだん上の方へ上つて来て、息が出来ない位に切なくなつて来ると、黒ん坊はどうとう妾の両足を捉まえて、足首の処を両手でギューと握り締めちやつたの。

そんな時に妾は、初めて、大きな声を振り絞つたわ。両手を顔に当てて力一パイ反^そりかえりながら、

「助けて助けて助けて。ヤングヤングヤングヤング」

つてね。ええ……それあ大きな声だったわよ。咽喉^{のど}が破れる位嘸^{どな}鳴つてやったんですもの。そうして両足を押えられたまま、起き上つては反^そりかえり反^そりかえりして、固い床板の上に頭をブツ付け始めたの。死んだ方がいいと思つてね。

そうしたら黒ん坊もその勢いに驚いて、諦^{あきら}める氣になつたんでしよう。

「……ウウウウ……そんなに死にてえのかナア……」

つて喘^{あえ}ぎ喘^{あえ}ぎ云いながら、妾の両足を掴んで、床の上をズルズルと、片隅に引っぱつて行くと思つたら、そこに置いてあつたらしい細い針^{はり}金^{がね}で、足首の処から先にグルグルグ

ルグルと巻き立てて、胸の処まで袋ごしに締め付けてしまったの……。

その時の苦しきったら、それあ、とてもお話ししたって解かりやしないわよ。だってチヨットでも太い息をするか、動くかすると、すぐに長い細い針金が刃物みたいに喰い込んで、そこいら中の肉が切れて落ちそうになるんですもの……それでいて、いくら喘いでも喘いでも喘ぎ切れない位息が切れているんですもの……妾はそのまま直ぐに気が遠くなっちゃった位なの。けども又すぐに苦しまぎれに息を吹きかえすと、又もや火の付いたように針金が喰い込むでしょう。地獄の責め苦ってほんとうにあの事よ。そうして息も絶え絶えにヒイヒイ云っているうちに今度は本当に氣絶してしまったらしいの。

それから何分経ったか、何時間経ったのかわからないけど、又自然と息を吹き返した時には、妾はもう半分死んだようになっていたようよ。手や足の痛みがわからなくなってしまうてね。……そうして眼だけを大きく見開いてどこかを凝視^{みつ}めていたようよ。だからその時に聞いた話も、夢みたように切れ切れにしか記憶^{おぼ}えていないの。

「……どうでえ。綺麗な足じゃねえか」

「ウム。黒人^{ニガ}の野郎、こいつをせしめようなんて職^{しよくす}過ぎらあ」

「面が歪つらゆがんでくれえ安いもんだ。ハハハ」

「しかし、よつぽど手酷てひどく暴れたんだな。あの好色野郎すけべえが、こんなにまで手古摺てこずったところを見ると……」

「フフン、勿体もったいなくもオブラーコのワーニヤさんだかな」

「ウーム。十九だつてえのに惜しいもんだナア……コンナに暴れちやつちや、ヤングだつて隠しとく訳に行くめえが……」

「……シーツ……来やがつた来やがつた……」

つて云ううちに、又一人、スパリスパリと煙草を吹かしながら、軽い、氣取つた足取りで階段を降りて来て、悠ゆつくり悠つくりと妾の傍に近づいた者が居るの……。

その足音を聞くと妾は氣もちが一ペンにシヤンとなつちやつたわ。飛び上りたい位嬉しくなつて……ヤング……つて叫ぼうとしたのよ……。

ただ妾が起き上ろうとすると、手や足が、胸の処まで氷みたようになって、動かなくなつてることがわかつたの。それと一緒に、声がピツタリと咽喉のどに悶つかえてしまつて、名前を呼べる位ならまだしも、声を立てる事すら出来なくなつてゐるじゃないの。何だかそんな夢でも見ているように胸の処こわが固こわばつてしまつてね。もしかすると、あんまり怖い眼

に会い続けたので気が変になっていたのかも知れないけど……。

そうするとヤングは、長い長い大きな溜め息を一つしてから、静かな、猫撫で声かと思うくらい優しい口調で、こんなお説教を妾にして聞かせたの。上品な露西亞語でね……。

「ワーニヤさん。溫柔おとなしくして頂戴……。私は貴女あなたが憎いから、こんな事をするのじ

やありません。よござんすか。よく気を落ち着けて聞いて頂戴……。ね。私は貴女が可愛いくて可愛いくてたまらない余りにコンナ事をするのです。私は貴女が、あんまり綺麗で可愛いから、亜米利加アメリカの貴婦人と同じようにして殺してみたくなつたのです。ね。いつぞやお話して上げた恋愛こゝろごつこの事を、まだ記憶おぼえていらつしやるでしょう、ね、ね、わかつたでしょう。……私は最早もう近いうちに日本と戦争をして戦死をするのです。ですからもう、貴女以外の女の人と結婚する事は出来ないのです。貴女と一緒に天国に行くよりほかに楽しみは無くなつたのです。ですから満足して、私の云う事をきいて頂戴。ね、ね、溫柔おとなしく私の云う通りになつて死んで頂戴。ね、ね……わかつたでしょう。ね、ね……」

そう云ううちにヤングは妾の足に捲かつた針金を解き始めたの。そうして胸の上までユツクリユツクリ解ほどいてしまうと、

「サアサア。寒かつたでしょうね」

つて云いながら、又、もとの通りに袋を冠^{かぶ}せて口をシツカリ括^{くく}つてしまったの。

ええ……妾はちつとも手向いなぞしなかったわ。死人のようにグツタリとなって、ヤングのする通りになつていたわよ。

その時のヤングの声の静かで悲しかったこと——ほんの一寸^{ちよつと}の間^まだったけど、妾の胸にシミジミと融^とけ込んで、妾に何もかも忘れさしてしまったのよ。……何だか甘い、なつかしい夢でも見ているような気もちになつてね……ネンネコ歌にあやされて眠つて行く赤ん坊みたように、涙が止め度なく出て来たもんだから、妾はどうとう声を出してオイオイ泣き出しちゃつたの。

「……ヤング……ヤング……」

つて云つてね……そうするとヤングは一々丁寧に返事をしいしい妾を袋に入れてしまつてから、今一度妾の頭の処を、袋の上から撫でてくれたわ。

「……ね……ね……わかつたでしょう、ワーニヤさん。溫柔^{おとな}しくするんですよ。サアサア。もう泣かないで泣かないで。いいですか。ハイハイ。私がヤングですよ。いいですか。サ……泣かないで泣かないで」

そう云つて妾をピツタリと泣き止まして終^{しま}うと、静かに立ち上つて、這入つて来た時と

同じように気取った足音を立てながら、悠々と階段を昇ってどこかへ行ってしまったの。

だけど妾は、やっぱり夢を見ているような気持ちになって、シャクリ上げシャクリ上げしながらグツタリとなっていたようよ。そうすると、あとに残った三人の男たちは手^て手^でに妾の頭と、胴と、足を抱えて、上の方へ担ぎ上げながら、黙りこくって階段を昇りはじめたの。そのゆっくりゆっくりした足音が、静かな室^{へや}の中にゴトーンゴトーンと響くのを聞きながら、妾は何だか、教会の入口を這入って行くような気持ちになっていたようよ。

だけど第一の階段を昇ってしまうと間もなく、一番先に立って、妾の足を抱えていた男が、変な声でヒョックリと唸^{うな}り出したの。そうして何を云うのかと思っていると、

「ウーム。ウメエもんだナア。ヤングの畜生、あの手で引っかけやがるんだナア。どこへ行っても……」

って、サモサモ感心したように云うの。そうすると妾の腰を担いでいた男も真似をするように唸り出したの。

「ウーム。まるで催眠術だな。一ペンで温順^{おとな}しくしちまやがった」

そうすると又、妾の頭を担いでいた男が、老人^{としより}みたような咳をゴホンゴホンとしながら、こんな事を云ったの。

「十七人の娘の中で、ワーニヤさんだけだんべ……天国へ行けるのはナア」

「アーメンか……ハハハハハ」

こんな事を云っているうちに、又二つばかりの階段を昇ると、ザーザーという波の音がして甲板へ出たらしく、袋の外から冷たい風がスースーと這入って来て、擦り剥けた臂の処が急にピリピリ痛み出したの。それと一緒に明るい太陽の光りが袋の目からキラキラとさし込んで来て、眼が眩むくらいマブシクなつたので、妾は両手で顔をシツカリと押えていたようよ。そうしたら足を抱えていた男が、

「サア……天国へ来た……」

「ウフフフ。ワーニヤさんハイチャイだ。ちつとハア寒かんべえけれど」

「ソレ。ワン……ツー……スリイツ……」

と云ううちに、妾をゆすぶっていた六ツの手が一時に離れると、妾はフワリと宙に浮いたようになったの。

その時に妾は何かしら大きな声を出したようよ。……やつと夢から醒めたようにドキンとしてね……だけど、そう思う間もなく、妾の頭が、船の外側のどこかへ打つかると一処にガーンとなつてしまつて、いつ海の中へ落ち込んだかわからなかったの……。

それから又、妾が気が付いて眼を開いたのは、一分か二分ぐらい後のようにしか思えないのよ……何だか知らないけれど身体中に痺れが切れて、腰から下が痒くて痒くてしようがないように思っているうちに、フイツと眼を開いてみたら、そこは忘れもしないこのレストランの地下室でね。いつぞや肺病で死んだニーナさんが寝かされていたその寝台の上に、湯タンポと襪褌つ布片で包まれながら、素っ裸で放り出されているじゃないの。おまけに寝台の横でトロトロ燃えているペーチカの明りでよく見ると、妾の手や足は凍傷で赤ぶくれになっていて、針金の痕が蛇みたいにビクビクと這いまわっている上から、黒茶色の油膏薬がベトベトダラダラ塗りまわしてあるじゃないの。その汚ならしくて気味の悪かったこと……妾何だかわからないままビクビクして泣き出しちゃった位よ。

……だけど、それから間もなく料理番の支那人が持って来てくれた魚汁の美味しかったこと……その支那人のチーっていうのに聞いてみたら、その時は妾が死んでからちようど二日目だったそうよ。……妾の袋は、ルスキー島から二海里ばかりの沖へ投げ込まれると間もなく、軍艦と擦れちがったジャンクに拾われたので、その船頭の女房の介抱で息を吹き返したんですってさあ。十七番のナターシャさんも同じジャンクで拾われていたし、パ

ン屋のソニーさんも鯨捕り船だったかに拾われて来たのを、白軍の巡邏船^{じゆんらせん}が見付け出して警察に引き渡したんですって。だけど、みんな水をドツサリ飲んでいたんで駄目だったんですとさあ。そのほかの袋は十日ばかり経ってから、タツタ二個だけ、外海^{そとうみ}の岸に流れ付いたそうよ。妾怖いから見に行かなかったけど……ホントに可哀そうでしょうがないの……。

妾……この話をするのはあんたが初めてよ。いいえ……誰も知らないの……みんな死んでいるから……。

それあ浦塩^{ここ}ではかなり評判になつていらしいのよ。……ええ……あんたが知らないのは無理もないわよ。あんたはまだ浦塩^{ここ}に来ていなかったんですからね。おまけに警察でもこの家^{うち}でも、まだ秘密にしているから、新聞にも何も書いてないそうよ。おおかた亜米利^{アメリカ}加^カを怖がつているのでしょうか。あの軍艦がしたらしい事は、みんな感づいているんですからね。

ええ……それあ何遍も何遍も訊^きかれたのよ。一体どうしてこんな眼に会わされたのかつてね。妾が気が付いてから後^{のち}の一週間ばかりというものの、警察の人や、うちの主人や、そ

のほかにも役人らしいエラそうな人が何人も何人も、毎日のように妾の枕元に遣つて来ちや、威おどかしたり、賺すかしたりしながら、ずいぶん執拗しつこく事情わけを尋ねたのよ。……おしまいには先方むこうから色んな事を話して聞かせてね……あのヤングっていう士官はトテモ悪い奴で、今年の夏に浦塩うらじおに着いた時に、軍艦の荷物が税関にかからないのをいい事にして、阿片あへんをドツサリ浦塩うらじおに持ち込んで、方々に売り付けてお金を儲けた事がチャンとわかつてるんだ……だけでも遣り方がナカナカ上手でハッキリした証拠が上らないために、どうすることも出来ないでいたんだ。……そうしたらヤングの畜生めスツカリ浦塩うらじおの警察を舐なめてしまつたらしく、今度は配下てしたの水兵にお金を遣るかどうかして、めいめいの色女を十何人も軍艦に担かつぎ込んで、上海シャンハイかどこかの市場ころしばに売りに行こうとしやがった。……けれども軍艦が沖へ出ると、それが上官に見つかるかどうかしたもんだから、一つ残らず海の中へ放り込ましてしまったのが、やつぱりあのヤングって奴なんだ。……しかもその中で生き残っているのはお前一人なんだからトテモ大切な証人なのだ。俺達は、お前の仲間十何人の讐かたきを取つてやろうと思つているのだから、早く気をシツカリさして返事をしてくれなければ困る。御褒美ごほうびの金かねはいくらでも遣るから本当の事を云つてくれ……一体お前は何と云つてヤングに欺されたのか。どうして船の中に連れ込まれたのか。そうしてドンナ

間違ひから海の中に放り込まれるような事になったのか……ナンテいろんなトンチンカンな事を真剣になつて訊^きくの……。

だけど妾どうしても、それに返事する事が出来なかつたのよ。……お前さんたちが云つてゐるのはみんな嘘だ。ヤングはそんなに悪い人間じゃない。悪い奴はあの船の司令官一人だつて云つてやろうと思つても、どうしてもその訳を話す事が出来なかつたの。……何故つていうと、妾、正氣に歸つてからちようど一週間ばかりというものの、口を利くのが怖くて怖くてしやうがなかつたんですもの。どうしてもその時の恐ろしさが忘れられなくて「ハイ」とか「イイエ」とかいう短かい返事をするのさえ怖くて怖くてたまらない氣がしてね。それを無理に口を利こうとすると、齒の根がガタガタ云い出して、すぐに吐きそうになつて来るんですもの……仕方がないから丸で唾^{おし}者みたやうになつて、眼ばかりパチパチさせていたら、警察の人達もとうとう諦^{あきら}めてしまつて、来なくなつたようよ。

……だけでも、そうして妾が一人ボツチになつてから、ウトウトしようとする、すぐに、あの時の氣持が夢になつて見えて来て、寢床の中で汗ビツシヨリになりながら、一生懸命に藻搔^{もが}かせられるの。夢うつつに敷布を噛み破つたり湯タンポを蹴り落したりしてね。その恐ろしさつたらなかつたわよ。そうして、そんな夢のおしまいがけにはキツトあのヤ

ングの悲しい、静かな声が、どこからともなくハッキリと聞えて来て、妾をサメザメと泣き出させたの。眼が醒めてから後^{あと}までも、妾は、そんな言葉の意味を繰り返し繰り返し考えながら眼をまん丸く見開いて、いつまでも暗い天井を見詰めていたわよ。

そのうちに十日ばかりも経つと、凍^{しもやけ}傷の方が思ったよりも軽く済んだし、針金の痕^{あと}も切れ切れになつてお化粧で隠れる位に薄れて来たの。それにつれて身体^{からだ}がもとの通りに元氣付くし、口もどうにか利けるようになって来たので、寝ているわけにも行かなくなつて、思い切つて舞踏場へ出て見たら、間もなく、あんたが遊びに来たでしょう。

それあ不思議といえばホントに不思議でしようがないのよ。妾はあんたに会つたのが、神様の引き合せとしか思えないのよ。だつて初めてあんたに会つたあの晩ね、あの晩から妾はピツタリと、そんな怖い夢を見なくなったのよ。おまけに前と比べると丸で生れかわつたように饒^{おしやべり}舌娘になつてしまつてね……そうしてそのうちに、あんたがたまらない程可愛いくなつて来るにつれて、あのヤングが云つていた色んな言葉の本当の意味が、一つ一つに新しく、シミジミとわかつて来たように思うの。そうしてヤングから教^{おそ}わつた色んな遊びをあんたに教えて見たくしようがなくなつて来たの。それも、当り前の打^ぶつたり絞^しめたりする遊びなんかじゃ我慢出来ないの……一と思いにあんたを殺すかどうかして終^{しま}

わなくちやトテモやり切れないと思うくらい、あんたが可愛いくて可愛いくてたまらなくなつたのよ。

……妾、それをやつとの思いで今日まで我慢していたのよ。何故つて、万が一にも妾からそんな話を切り出したら、あんたがビックリして逃げ出すかも知れないと思つたからよ。……だけど、それがもう今夜という今夜になったらトテモ我慢がし切れなくなつちやつたのよ。

妾はきようも、いつものように日暮れ前からこの室に這入つて、お掃除を済まして、ペーチカに火を入れたの。そうしてスツカリお化粧を済ましてから、あんたを待ち待ち昨夜の飲み残しのお酒を飲んでいたら、そのうちに室へやの中が静かアに暗くなつてね。向家むこうの屋根の雪の斑まだらと、その上にギラギラ光っている星だけがハッキリと見えるようになって来たじやないの……妾もうスツカリあの晩と同じ気もちになつてしまつてね……たまらなく息苦しくて息苦しくて……。アラ……睡つちや嫌いやよ。……睡らないで聞いて頂戴つてばさあ……まあ嫌だ。本当に酔つちやつたのね……人が一生懸命に話しているのに……。

……ね……わかつたでしょう……あんたにもわかつたでしょう。妾のそうした気持ちちが……ね……妾、お酒に酔つて云つているのじやないのよ……いいこと……ね。ね。だから

妾は今夜こそイヨイヨ本当にあんたを殺そうと思って、ワザワザこの短剣を買って来たのよ。英国出来の飛び切りつていうのをサア。一寸御覧なさいってば……このよく斬れること……妾の腕の毛がホラ……ヒイヤリとして……ね。ステキでしょう。いいこと。……この切っ尖であんたの心臓をヒイヤリと刺しとおして、その血のついた刃先を、すぐにズブズブと妾の心臓に突き刺して死んで終おうと思っっているのよ……トテモ気持ちのいい心臓と心臓のキツスよ。ヤングが教えてくれた世界一の贅沢な……一生に一度っきりの……アラツ……妾今やつと思ひ出したわ。日本の言葉で、こんな遊びの事をシンジユウっていうんでしょう、ね、ね。

……サア。本気で返事して頂戴よ。睡らないでサア。サアってばサア。……いいわ。妾あんたが睡ってたつて構わないから……そのまんま突き刺しちゃうから……いいこと……？ ねッ……死んでくれるでしょう。ね……いいこと……殺しても……嬉しい……じゃ……お別れの乾杯よ……ね……そうして寢床へ行くのよ……サア……。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年3月24日第1刷発行

底本の親本：「押絵の奇蹟」春陽堂

1932（昭和7）年12月14日発行

初出：「新青年」

1929（昭和4）年4月号

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

支那米の袋

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>